

2024.5.1 松岡 環

4月20日(土)は、TUFS Cinema『マダム・イン・ニューヨーク』上映にお運び下さり、ありがとうございました。上映後に解説をさせていただいた松岡です。

あの折に書面でお寄せ下さった皆様のご質問にお答え致します。答えやすいようにご質問を勝手に分類しておりますが、悪しからずご了承いただければ幸いです。なお、ご質問中で、インドの言葉等に関して誤記があったものは、訂正して続く[]内に「誤:」として元の書かれた単語を入れてあります。こちら悪しからずご了承下さい。

松岡の回答は【回答】として記してありますが、松岡の知恵の及ばないご質問に関しては、主催者側の萬宮健策先生、藤井美佳さん、ビオスコープ社大向敦・貴子ご夫妻のお知恵もお借りしています。

【回答】に()書きでお名前の入っているものがそれに該当しますので、ご参照下さい。

そういう手順を踏んでおりましたので、回答が遅くなりましたこと、お許しいただければ幸いです。



<すぐにお答えできるご質問>

【質問①】「ジャズ」の発音を子供たちが笑っていましたが、日本人(少なくとも私)にはさほど違っていたりおかしかったりとは思えませんでした。「間違った」方の発音は何かヒンディー語で意味をもってしまうものなのか、疑問です。

【回答】

おっしゃる通りで、私も「？」となり、ソフトが出てから聞き直してみました。シャシの発音は「Chance Dance」と聞こえるので、それで笑われた、ということでは、と思いますが、「Jazz」はインド人にも馴染みのある単語ですし、これは、監督に聞いてみるしかないかも。

【回答(萬宮)】

jazz は、英語では[jæz]と発音され、「ア」の口の形のままで「エ」と言えば、近い発音となります。この発音はヒンディー語に借用されると、一般的に「ア」や「アー」という発音にはなりません。そこで、シャシの「ジャズ(字幕では「ジャアズ」)」に近い発音は、英語ができない人の発音、もしくは相手に通じない発音として認識されたため、英語の発音の訓練を受けたサプナなどに笑われたと考えればよいと思います。カタカナなら、「ジェーズ」の方がインドでは通じるはずです。

【回答(藤井)】

日本語では、「Jazz」を「ジャズ」と書き、読む時にはカタカナで書いたとおりに読み、両者の発音の違いに対して多くの日本人はあまり意識的ではありません。ですから質問なされた方が、同じじゃないかと感じられたのは自然なことだと思います。

これが吹き替え版だったら声優が発音を変えて両者の違いを表現することもできますが、字幕は“読み物”ですから、日本語の文字を使って何らかの表現をしないではいけません。「Jazz」と「ジャズ」は本来、発音が異なるものの、日本語で訳語を当てはめる場合には「Jazz」=「ジャズ」が正しいので、娘や夫の台詞を「ジャズ」と記すしかなく、一方、シャシの「Jazz」については「なんだかちょっと奇妙な発音」であることを示すために、この映画では「ジャアズ」という文字で表現されたのだと考えます。

【質問②】作中、英会話教室のみんなでみていた映画のタイトルと、プレイしていたボードゲームが分かりましたら知りたいです。

【回答】

映画のタイトルは解説時にも言いましたが、『雨の朝巴里に死す』(原題:The Last Time I Saw Paris)で、製作は1954年、主演はエリザベス・テイラーです。『マダム〜』のソフトをお持ちの方のために言うと、この映画のタイトルは1時間12分の所に出てきます。会場で言及できたのはこのご質問票を休憩時間中に見ていたからで、ご質問に感謝！です。会場でも言ったように、『雨の朝巴里に死す』は製作から50年経ったので著作権が切れており、それで監督は使ったのだと思います。どんな映画かは、日本版 Wiki の説明とかがありますので、検索してみてください。

ボードゲームの方のご質問は、歌「♪English Vinglish」の第2パート、1時間17分の所に出てきた、シャシとローランがやっているアルファベット字並べゲームのことではないかと思います。あれは一時期日本でも流行った「スクラブル・ゲーム(Scrabble Game)」です。メーカー等は特定できませんが、同様のゲームが通販サイトなどで探せますのでチェックしてみてください。

【質問③】たがいに通じない言語、フランス語とヒンディー語[誤:ヒンドゥー語]による会話を初めてみましたが、これには前例があるのでしょうか。

【回答】

多言語国家インドの映画では、互いの言葉がわからないまま勝手にしゃべっている、というシーンは割と出てきますが、フランス語とインドの言葉(この場合はヒンディー語)、そしてシリアスな内容を延々としゃべる、というのは珍しいです。

【回答(大向)】

この場面に関してはひとつエピソードがございます。

ローランの話すフランス語に日本語字幕を入れることに本作のプロデューサーである R・バールキさんに猛反対を受けました。

と、いうのもインドでの上映時にはフランス語には字幕がつけずに観客はシャシと同じくローランが何を話しているのかわからないまま会話が続きます。

わからないままの会話でのコミュニケーションもこの映画で伝えたかったことだったのです。

それを受けてフランス語部分の字幕を外し、パンフレットにその訳を入れる案もございましたが、それでは何事もすべて理解したい日本の観客の皆様は納得されないということで R・バールキさんに承諾を得て字幕を入れたままにいたしました。

【補足(大向)】

シンデー監督から聞いたお話ですが、映画を観た女性は「ローランと一緒になればいいのに」とシンデー監督に言った方も少なからずいらっしゃったようです。

撮影時にはシュリデヴィさんの娘さんたちまで「ローランと結ばれたらいいのに」と言っていたそうです。

そんな反応だったので、ローランを演じたメーディ・ネブー氏がプレミアか何かでムンバイに来た時にはファンの女性達が大歓迎をしたそうです。

【質問④】ラドゥはお祝い事で食べるものなのですか？ それとも、もっと日常的に食べるもの？

【回答】

ラドゥは日常的に食べるお菓子です。祝い事とお菓子に関しては、次のご質問もご参照下さい。

【質問⑤】お菓子が印象的に登場していました。他のインド映画でも、様々なお祝いの場面でよくお菓子を配るところを見ます。どんな時に、どんなお菓子を配るなどの作法(ルール?)が決まっているのでしょうか？

【回答】

インド伝統菓子は、結婚式等の祝い事や、自分の家族に慶事、例えば息子が大学に合格した、娘の就職が決まった、などがあつた時によく配られます。「口を甘くして下さい」と言いながら、ラドゥ(=ラドゥー/laddu)やバルフィー(barfi)、ペーラー(peda)等々を職場の同僚や近所の人などに配る姿は、おっしゃる通り映画の中でもよく登場しますね。お菓子の種類による配布 TPO は特にはありませんが、祝われる主人公の性別によって、女性名詞の菓子(バルフィー)か男性名詞の菓子(ラドゥ、ペーラー)かの選択が変わる、という話もあります。こういった伝統菓子は結構値段が高く、見栄を張る人は有名菓子店で買った証拠の菓子箱をさりげなく見せながら配るようです。上記の菓子がどんなものかは、日本語で検索しても出てきますし、詳しい作り方は英語サイトや YouTube にいっぱい登場します。(下の写真はムンバイの菓子店。下から 3 段目左の方がラドゥ、上から 2 段目はペーラー、最上段はバルフィー。私が買った別のケースのお菓子は 3 個で 100g、計 100 ルピーでした。下の写真でも、「840/per Kgs」とあるように、1gが0.84ルピーだと安いようですが、このバルフィー1個で約 30g=20ルピーとか30ルピーするので、大きなサモウサ1個ぐらいの値段になります。高い！)



【質問⑥】シャシのお仕事(ケータリング)のような事業をしている女性は、インドではよくあるものなのでしょうか？

【回答】

ネットで検索してみましたら、「インド人主婦がお金を稼ぐための40のアイデア」という記事があり、その中には自宅で作って売るものとして、パン、ビスケット、インド式アイスクリーム、ジャム、パーパル(薄い揚げ or 焼きせんべい)等が、衣類やバッグ、アクセサリなどと共に並んでいました。別の

映画でも、焼き菓子ケーキを作って売っている主婦が登場したことがありますし、そう珍しいものではないようですが、伝統菓子を手作りして売るのは、現在では珍しいかも知れません。

【質問⑦】結婚式のだいが前からお祝いをしている(お祭りムード?)ようでしたが、これは風習なのですか？

【回答】

インドの結婚式は挙式する日の前にもいろいろな行事があり、数日間続くのが普通です。新郎、新婦がそれぞれ実家で体にターメリックを塗って清めるハルディー(ターメリック)セレモニー、女性だけが集まって新婦を囲んで歌い踊るサンギート(音曲)の日など、地域等によってもいろいろ違いますが、おっしゃる通りお祭りのように数日間楽しめます。日本語サイトにもいろいろ出ていますが、詳しく知りたい方は「Indian pre-wedding ceremony」で英語サイトを調べてみて下さい。

【質問⑧】劇中で息子さん(サガル?)がやっていた、自分で自分の両耳を触るしぐさは、どんな意味があるんですか？(シャシがラドゥを作り直しているところに来てやっていました)

【回答】

一瞬ですが、よくお気づきになりましたね。あれは、「ごめんなさい」のしぐさです。両手でそれぞれの耳を触るほか、手を交差させて左手で右耳、右手で左耳を触る時もあります。さらに「ごめんなさい、もうしません」というお詫びの気持ちを強く表したい時は、耳をつかんだままスクワットを2、3回しますが、この時に「トバー、トバー(二度と過ちをしません)」と言うこともあります。(下写真、モニターの画面撮りなので、画像があまりきれいではありませんが、このシーンです)



【質問⑨】結婚式のシーンで、主人公が夫からもらったサリー[誤:サティ]を着ていましたが、あのサリーは慣例として夫が妻に渡すものなのか知りたいです！直接渡さずベッドに置いているのが、自己表現が苦手な夫のキャラクターに合っていてほっこりしました。

【回答】

赤いサリーは、多くの地域で花嫁衣装として使われますが、参列者が赤色を着ていてもNGとはならず、かまわないようです。しかし、結婚式に参列する妻に赤いサリーを贈る、というのが慣例になっているとは聞いたことがありません。推察するに、お姑さんが「結婚式に参列するんだから、シャシにも普段とは違うサリーを持って行ってあげなさい」とか言って、持たせたのでは、と思います(笑)。おっしゃるとおり、あの渡し方はサティシュラしかったですね。

なお、「サティ(サティー)」は、「夫が亡くなった時、妻が夫を焼く炎の中に飛び込んで殉死すること」

を表す言葉なので、お間違えのないようご注意ください。民族衣装は「サリー(サーリー)」です。

【質問⑩】ヒンディ語映画、タミル語映画、両方に1人の役者が出て行き来するというようなことがインド映画では行われているようですが、言語的にどちらの映画に出ることも問題ないというような状況がインドにはあると考えてよいのでしょうか。

【回答】

おっしゃる通りです。インドだけでなく世界中で行われていて、例えばハリウッド映画に日本人俳優の渡辺謙や真田広之が出るのも、今や普通のことですよね。インドは特に、吹き替え技術が昔から発達しているので、その言語が話せなくても、適当な口の動きさえ見せていればアフレコ(=アフターレコーディング)で声を入れるというのが多くの映画で行われています。日本の洋画の吹き替え版が全然違和感がないように、例えばインド映画『RRR』は、テルグ語版でもヒンディー語版でもまったく違和感がありません。日本と同じように、吹き替えを担当する声優には優秀な人が揃っています。俳優自身が、母語以外のヴァージョンでも音声を担当する場合もありますが、多くの場合は吹き替えです。シュリデヴィも、ヒンディー語映画界に移ってしばらくは、セリフ音声はヒンディー語の声優やタミルナードゥ州出身の先輩女優レーカーに頼っていた、と言われていました。

【質問⑪】タミル語版では、一家の住んでいる場所もタミルナードゥ州になっているのでしょうか？ プネーのままだと、ビザの取得の際に「君はヒンディー語分らないよね？」と皮肉を言われる男性に「 // タミル語 // ? 」と言うことになるので、そもそもプネーあたりでタミル語が分かる人がいるのか？と思いました。

【回答】

タミル語版は、「タミル語吹き替え版」なので、一家が住んでいるのはプネーのままです(ヒンディー語版と同じように、劇中では特に言及はされません)。ただし細かい点——例えば冒頭シャシが朝起きて読む新聞がタミル語のものになっていたり、サプナの学校で神父さんに「タミル語で話していただけます？」と頼んだりするような点では、変更が行われています。ですので、ビザ申請のシーンも、「君はタミル語が分らないよね？」になっています。プネーにもタミル人は多く住んでおり、プネーの人口(約735万人)の約2%ずついるテルグ語話者やカンナダ語話者よりは少ないですが、1%としても7~8万人はいるので、タミル語が聞こえる機会は多々あります。

【質問⑫】インドの女性を描いた映画に興味があります。(古いもの、新しいもの) 先生のおすすめをおしえていただければ幸いです。

【回答】

「女性を描いた映画」という意味は、「女性問題を描いた映画」では、と思うので、日本で公開、あるいは映画祭上映された作品をいくつか挙げておきます。現在、日本語字幕版が見られる作品は少ない(映画は、配給権を買う時に5年間、とか期限を切って契約します。その期限が切れると上映はもちろん、ソフトのレンタルやスチール写真等の使用もできなくなります)ですが、探してみてください。

『運命の糸』(2006年/ヒンディー語/原題:Dor)

『クイーン 旅立つわたしのハネムーン』(2014年/ヒンディー語/原題:Queen)

『シークレット・スーパースター』(2017年/ヒンディー語/原題:Secret Superstar)

『パッドマン 5億人の女性を救った男』(2018年/ヒンディー語/原題:Padman)

『あなたの名前を呼べたなら』(2018年/ヒンディー語/原題:Sir)

『グレート・インディアン・キッチン』(2019年/マラヤーラム語/原題:The Great Indian Kitchen)

【回答(萬宮)】補足です。上記の映画の中には、Netflix などを通じて見られるものもあります。

【質問⑬】脚本がとてもすばらしく、原語(Hindi,英語)で読んでみたいです。出版されているものとかありますか？

【回答】

残念ながら出版されているものはありませんが、ネットに英語字幕スクリプトがアップされています。次の2つのアドレスのものです。出てこない場合は、「English Vinglish full movie script」で検索してみてください。

[English Vinglish \(2012\) Movie Script | SS \(springfieldspringfield.co.uk\)](http://springfieldspringfield.co.uk)

[English Vinglish Movie Script \(scripts.com\)](http://scripts.com)

<難度 I のご質問>

【質問⑭】シャシはなぜ英会話教室へ通っていることを家族に話せないままでいたのでしょうか。

【質問⑮】主人公が英語を学んでいることを家族にかくしていたのはなぜでしょうか。ラストのスピーチをドラマチックに演出するための伏線以外に理由があるのでしたら、教えていただきたいです。

【回答】

ご質問⑭と⑮をまとめてお答えします(以下でも同様にまとめてお答えする場合があります)。

家族に話せば、また「Jazz Dance」の時のような馬鹿にする反応が返ってくるかも、とひるむ気持ちがシャシにあったのでは、と思います。姪のラーダにはバレますが、その母である姉のマヌにも打ち明けてもよかったのでは、とは思うものの、⑮の方のおっしゃる通り、ラスト近くの様々な出来事を上手に演出するためにこの設定が考えられたのかも知れません。

【質問⑯】ニューヨークからインドに帰る飛行機の中で、NEW YORK TIMES ではなく、「ヒンディー語[誤:ヒンドゥー語]の新聞はありますか？」ってキャビンアテンダントに聞いたのは、なぜですか？

【質問⑰】けっきょくさいごのシャシが「NY times(?)」でなく「ヒンディー語のしんぶんはある？」といい直したのは(私はあくまでもヒンディー語の人生をおくるから、英語は選択しないわ)という意味ですか？

【質問⑱】彼女の人生は主婦なんですか？ ヒンディー語【誤:ヒンズー語】の新聞を airplane で頼んでました。

【質問⑲】最後の飛行機のシーン、英語の新聞をシャシが断るシーンについて、解釈を伺いたいです。

【回答】

ご質問⑯～⑲にまとめてお答えします。

これについては、『マダム・イン・ニューヨーク』パンフレットの中にある監督インタビューで、ガウリ・シンデー監督が下のように語っています。映画評論家金子裕子さんのインタビューなので、Q&Aの両方を再録します。

Q:異文化で自分を取り戻すシャシが、それでもずっとサリーを着続けているわよね。

A:彼女は自分のことが嫌いなわけじゃない。本当は好きなの。サリーを着ているからって、保守的なわけでもない。彼女の変化は内面的なものだから、服まで変える必要はないと考えたの。洋服を着せても彼女が変わったことにはならないわ。本来の自分を取り戻した彼女は最後に、ヒンディー語の新聞を選ぶんだから。

もう少し付け加えると、このシーンより前、夫が到着した日の明るる朝に、「チャイくれ」と言って起きてくる時、シャシは英語新聞を読んでいますね。あそこでもう、シャシは十分英語を身につけたことがわかるので、帰途の機内でのダメ押しは必要ないし、まして夫がすでに英字紙を手に入れているので、自分は「ヒンディー語新聞があれば久しぶりに読みたい」と思うのも自然ではないかしら、と思います。

【質問⑳】この映画を観るのは2度目です。1度目も覚えた設定上の違和感を本日も覚えました。

1点目は、シャシを含め英会話スクールの生徒が母国、母語にアイデンティティの重きを置いている点。とりわけシャシは、ラストシーンのスピーチで「自分を助けるのは自分」と言いながら、機内でヒンディー語の新聞を選ぼうとしたり、本人が幸福そうにしている、自信を得た「だけ」のように思えます。2点目は、女性、ヒンディー話者、妻、母であるシャシが、その役割から脱却しない「限りは」彼女の英語学習が肯定されている点です。解説者様はこれらの設定、演出をどのように評価していますか？

【回答】

1点目ですが、NYに暮らす外国籍あるいは外国にルーツのある人々が、母国、母語にアイデンティティの重きを置いているのはごく自然なことだと思います。英語はコミュニケーション・ツールということが第一で、そこから始まって英文学や英語映画を楽しむこともしますが、同時に母語の文学や映画、音楽も楽しんでいるのはあたり前では？ それにあの生徒さん達は、シャシが作って持って行ったインド料理の数々もためらわずに試食していました(デヴィッド先生は辛さにヒューヒュー、という描写が入ってましたが)ので、どの人も文化的偏見のない人に描いてあったのでは、と思います。

2点目は、おっしゃりたいことは「妻、母としての役割から逸脱しない限りは英語学習が肯定されるように描かれている」ということでしょうか。息子が怪我をした時のシャシの態度や、ラドゥを作り直すことを優先し、試験に行かなかった、という描かれ方がご不満だったわけですね。ただ、あそこで、「私は今、英語を勉強しているのよ。あなたたちが来ていたって、学校を優先させるわ」とシャシに言わせて行動に移させると、見ている私たちはシャシに共感できるでしょうか？ あくまでも作劇手法としてですが、最後のスピーチ場面も成立しなかったと思います。そしてスピーチでは、シャシは英語がしゃべれるようになったこと以外にも、家庭内における男女平等をしっかりと言葉にして主張できる見識を備えた、ということが見て取れます。夫や娘がしょんぼりして反省する姿はなくもがなですが、英語学習を通じてシャシが大きく変わったことがわかり、観客は心の中で拍手したのでは、と思います。解説でも言ったように、とてもよくできた脚本であり、演出であると思います。

<難度Ⅱのご質問>

【質問㉑】インドでのヒンディー語と英語の使い分けがどのようになっているかととても気になりました。

【回答】

ご質問の意味がちょっとわかりにくかったのですが、例えばヒンディー語が母語の人が、英語をどのように使い分けているか、ということをお聞きになりたかったのでしょうか？ 最近のインド映画を見

ていただくとよくわかるのですが、ある人が英語でしゃべったすぐあとにヒンディー語に切り替えてしゃべったり、ヒンディー語の一部に英語を使ったりしていることがよくあります。例えば、ヒンディー語映画『きっと、うまくいく』(2009)のセリフの例を挙げると――

「Sir actually ディツリー・メーン electricity バフット・ジャーティー・ハエー Sir、アウル・シャードイー・メーン・バリー problem ホーティー・ハエー Sir、ウス・キー・ワジャハ・セー(訳:学長、実際デリーでは電気がすごく消費されますー停電がすごく多いです(訂正:萬宮)、そして結婚式では大きな問題になっています、そのせいで)」

この程度なら、日本人も英語の単語をまぜて使っているのと同じですが、英語とヒンディー語を瞬時にスイッチさせてしゃべることも日常茶飯事ですし、ビジネスでは英語を使う、と言っても、相の手では「アッチャー・トー(えー、それでは)」とかヒンディー語を入れたりし、「使い分け」の意識がほとんどない、というのが都会のインド人だと思います。とはいえ人それぞれで、一口では言えませんが。

【質問②】インドでは

- ・人口のどのくらいの割合の人が英語を話せるのか？
- ・英語を話せるか話せないかで仕事が決まって将来が見えてくるのか？
- ・学校へ上がる前に人生をあきらめる人はいないのか？

【回答】

第一のご質問ですが、2011年の国勢調査では「英語が第一言語である」と答えた人は25万9678人という結果が出ています。第二言語として英語をあげた人は8271万7239人、第三言語としてあげた人は4556万2173人なので、それを合計すると1億2853万9090人で、この時の人口統計は12億1085万4977人、従って英語を言語として日常的に使っている人の割合は10.6%となります。

「英語を話せる」というのは、よく考えるとおわかりのように、非常にあいまいな定義です。上記のデータに依拠し、1割の人が英語を流ちょうに使えるのがインド、程度の認識でいかがでしょうか？

第二のご質問は、インドは多言語国家なのでコミュニケーションは英語に頼ることが多く、おっしゃるとおり英語が理解でき、話せることが就職や仕事上で有利になります。

第三のご質問ですが、「学校」とは小学校でしょうか？ しかし、幼稚園児が人生をあきらめる、というのも変ですよ…。

【回答(藤井)】

通う学校によって人生が決まってしまう社会であると気づいたとき、人生を諦めてしまうこともあるのではないかと想像なされたのではと思いました。諦める人もいるし諦めない人もいるので、お答えするのは難しいのですが…。

【質問③】インドの教育システムについて、もう少し詳しく教えて下さい。地元の言語による教育と英語による教育の2種類があるそうですが、教育カリキュラム(教育内容)はどちらの言語を選択しても同じですか。

【質問④】インドの教育システムが言語で2つに分かれているのはなぜですか？ 政治的な理由がありますか？ (ソ連の教育が現地語とロシア語の2つに分かれた文脈と似ているのかきになりました。)

【質問⑤】イングリッシュメディアムに通学している人達はインドでも富裕層になるのでしょうか？

【質問⑥】今のインドではほとんど英語教育を選択するの？ ヒンディー語をあえて選択するのはどん

な家庭？

【回答】

ご質問⑳～㉔にまとめてお答えします。

インドでは、イギリスの統治時代に近代的な教育制度が導入され、昔ながらの寺子屋(サタジット・レイ監督の『大地のうた』(1955)にも出てきましたね)やモスク付設のマドラサと呼ばれる学校から、近代的な教育施設＝イギリスに倣った初等や中等の学校ができてくるようになります。中でも、イギリスの教育制度を踏襲し、英語で教育を施す教育機関は、富裕層がこぞって子弟を通わせるようになり、初等、中等、高等教育機関が発達していきます。それが独立後もそのまま存続したのが英語ミディアム校で私立校、一方、独立後州政府の管轄下にできた公立校(government school)は、ヒンディー語、あるいはそれぞれの地元の言語で教育を施す学校となります。授業料は千差万別ですが、一般的に英語ミディアム校は学費が高く、それゆえに学校の設備も整っています。対して公立校は基本的に学費が不要で、制服や学用品も支給され、給食も無料だそうですが、粗末な校舎なども目立つとか。ですので、教育内容も千差万別だそうで、私立校の中でも格差があるようです。

というわけで、⑳のご質問に関しては「違います」、㉑のご質問に関しては、「政治的な理由ではなく、経済的な理由と言った方が当たっています」、㉒のご質問に関しては「大まかに言えばその通りです」、㉓のご質問に関しては、「ヒンディー語ミディアム校を選択するのは裕福ではない家庭がほとんどです」というお答えになります。

【質問㉔】自分を愛せない新しいものに目がいってしまうが自分を愛することが現状を愛することにつながるというシャシサシャ[誤:主人公の名前はシャシが正しいです。なぜシャシを消されてサシャと書かれたのでしょうか?]さんの言葉が胸に刺さりました。インドの学校では英語を話すことが昔禁じられていたとの会話がありましたが、それは何故か、またシャシ[誤:サシャ]の娘さんのように今は英語学習があたりまえになったのは、やはり国際化が進んだからなののでしょうか。

・カースト制ではやはり女性が下なののでしょうか。

【回答】

最初のご質問ですが、「学校では英語を話すことが昔禁じられていた」というのは、映画では35分ごろに出てくるマヌとシャシ姉妹の、昔の思い出話ですね。ここでは前提に「(昔、通った)ヒンディー語学校…」が入っているので、その字幕を見落とされたのだと思います。ヒンディー語で教育を行う、という建前から、生徒たちにも「英語は許されない」「ひと言も」になったのではないかと思います。

それから第二のご質問、「英語学習があたりまえになったのは国際化が進んだから?」に関しては、かつてインドがイギリス領だったことを見落としていらっしゃいます。そもそも、インドの近代的な学校制度はイギリスの統治下に整備されたもので、前述のように長い歴史を持っています。そこから出発した、「英語教育」なのです。

第3のご質問に関しては、カースト制度は男女の区別なく適用される、と言っては変ですが、このカーストの、男性はクシャトリヤ(四種姓の2番目)だが、女性はシュードラ(四種姓の4番目)である、というような分け方はありません。何か、違うことをお聞きになりたかったのでは、とも思いますが、このご質問は「カースト制＝四種姓では女性は男性よりも下、と規定しているのか」と読めますので。

<難度Ⅲのご質問>

【質問⑧】主人公のご家族は裕福な暮らしのように見受けられましたが、インドにおける富裕層に該当するのでしょうか。富裕層その他の所得層において女性が仕事を持つ事は一般的でしょうか。

【回答】

富裕層、とは言えないと思います。中流のうちの、上中下に分けると「上」、といったところでしょうか。インドでは以前から、富裕層と貧困層は女性が外で働くので、家庭内で女権が強い、と言われていいます。それに比べて中流層は保守的、と言われていたのですが、現在では何らかの形で働いている女性が多く、「保守的」とは言えなくなりました。朝夕のラッシュ時に鉄道に乗ると、女性専用車両は超満員です。下写真左は、乗換駅が近づき、出口に押し寄せる女性たちです。右は、3人がけの座席に4人目が横座りしている、ラッシュ時の鉄道車両内です。



【質問⑨】インド人は皆英語を話すのかと思っていました。夫がムンバイ駐在中ですが、あまり女性が1人で歩くようなところは見かけません。ましてNYで一人で行動することはどれほどの勇気と自立心が要ったことか。この映画は10年前ですが、今でも女性をとりまく環境はこのようなものでしょうか。今後変わっていくのでしょうか。

【回答】

片言の英語まで含めれば、インド人はほとんどの人が英語を話す、と言ってもいいと思います。それから、昼間ですと結構女性の一人歩きも多いですし、バイクや自動車を運転する姿も多く見かけます。またムンバイでは、メトロができてから公共交通機関で移動する女性が増えたのでは、と思います。上写真の国鉄の電車は、ラッシュ時は日本と同じく超満員ですが、メトロはそれよりも快適で、女性が乗りやすいのです。こんな風に、今後もどんどん女性を巡る状況は変わっていくと思います。

【回答・補足(萬宮)】

以下、萬宮個人の意見です。

なお、この映画はインドの中でもヒンドゥー教徒の家族を描いているので、これがそのままインド全体を表象しているとは言い切れないと考えます。ムスリム社会では、女性の社会進出は、1980年代に比べると格段に進んだと言えますが、それでもまだまだ難しいと言わざるを得ないと考えます。たとえば、シャシのように女性が1人で海外旅行するというのは、ムスリム女性では、よほど家族(特に夫)の理解がないと、通常はあり得ない設定です。

【質問⑳】インドでは今も妻、母は良妻賢母なんですか。

【回答】

インドの女性を見ていると、「良妻賢母」という感じはしないのですが。母親は強い、というイメージの方があてはまりますし、妻はきちんと自己主張ができる聡明さがある印象です。年長者に従う、というシーンは1980年代ぐらいまではよく見かけましたが、今は都会では核家族が多くて年長者もおらず、自立した女性が多い印象です。

【質問㉑】文化や性別、属性によって扱われ方が変わることが描かれていましたが、価値観の偏りからは逃げようもないと思います。

この映画では、英語とニューヨークという西洋が尊重したり目指すべきものとして描かれていますが、それでも残すべきインドの価値観は何があるか知りたいです。(例えば)

【回答】

私はこの映画に1点だけ不満があったのですが、それは、NY、つまり外国に行かないと女性の自立は実現できないのか、という点でした。2012年製作の映画ではそれが限界、とも言えますが、この10年でインド映画も変わってきました。現在ほとんどの映画では、何を描くにしても女性を表現するには、フェミニズム視点が入っていることが前提、という印象を受けます。

ご質問の「残すべきインドの価値観」という表現は、いろいろ考えてみたのですが、では、「残すべき日本の価値観は何がある？」と外国人に聞かれたら、答える前に反発してしまいそうですね。「おもてなしの心、とか、控えめな女性、とかを期待しているのかも知れませんが、価値観は個々人違いますし、“日本の”とくられる価値観がある方が不気味です」ぐらい、私なら言いそうです(笑)。インド人に訊ねても、「残すべき価値観？」と皆さん答えに窮するのでは、と思いますが…。

【質問㉒】日本人の私たちが見ても、夫婦間の関係という点でとてもシンパシーを感じる場所が多かったのですが、インドの、特に男性にはどのように印象を残したのか気になります。現地での感想や評判はどうだったのでしょうか。

【回答】

難しいご質問ですね。映画の反応は、例えば本作の Wiki には各映画評論家の批評が出ますが、その中の男性評論家もほとんどが5つ星中4つ星とかを与えているものの、それが即、男性の感じた印象、とは言えませんよね。インドでの公開時に、男女別に感想を聞いたデータも残っておらず、わかりません。ただ、興行収入は10億ルピー(現時点では日本円で18億円)を超えるヒットとなったので、男性観客も多く見に行ったり、彼らにも好評だったようだ、というぐらいの分析しかできません。

【回答(大向)】

男性の評判はあまり聞いたことがございませんが、あるインド人男性は自分を振り返ってか、「素晴らしい映画だが、二度と見たくない」と話していました。

【質問㉓】現在のインドでの“離婚”についてお伺い致します。私の知り合いで(日本人女性)が、インドからDVに遭い、どうにか別れて、日本に戻った方がいました。——主人公は、夫婦生活を続けますが——(又、離婚した場合、日本でもシングルマザーetc.経済的にも何かと大変ですが) インドではどんな感じでしょうか？

【回答】

インドでの離婚率は非常に低い、という統計があります。1000人中1.1人だそうで、1%以下です

ね。でも、私のお世話になったインド人は映画関係の人が多かったせいか、1980年代から離婚した女性の話を目にしたりしました。その女性は脇役女優だったのですが、私に話してくれた人(私のインドのお母さんの存在の人)は彼女に同情的で、「相手がひどい人だった。次は幸せになるといいわね」というような言い方をしていました。インドは家族やコミュニティが支え合う力が強いのですが、離婚も「恥」とかいう考え方ではなく、仕方なかったのだろう、困っていたら助けてあげよう、程度の感じで受け取られているのでは、と思います。ただ、これはムンバイの話なので、場所が違えばまた異なると思いますが。インドは本当に一口では言えないことが多く、研究者の先生方は、「私が調査した〇〇市の××地区ではこうだった」というように、前提条件を付けてご自分の分析をおっしゃる方が多いです。というわけで、私の【回答】はかなり大雑把すぎるのですが、少しでもご参考になれば幸いです。

<その他>

あと2通、ご質問が入っていたのですが、どちらも私が Cinetama 名で綴っているブログ「アジア映画巡礼」の読者の方で、その感想と、記事内で取り上げたインド映画関連の催しに対するご質問でした。申し訳ないのですが、今回の上映イベントとは関係のないご質問等でしたので、割愛させていただきました。ブログに関するご意見やご質問は、ブログのコメントを通じてお寄せいただければ幸いです。